

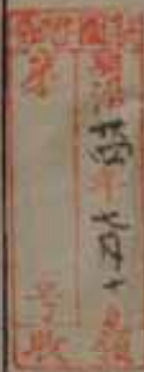
興風集

草

卷	一	詩
卷	二	詩
卷	三	詩
卷	四	詩
卷	五	詩

# 興風集

松下邨整藏版



追懷古人詩十首

秋湖久坂通武著

庚申除夕。予客江戶。會爐冷燈青。耿耿不寐。四顧甲寅以降事。時勢日變。我狄益驕。而此間志士仁人。殉難死節。及罹患疾。斃者不計。諸公之吏。皆抱於心目。夢寐之間。未嘗能暫忘也。歲云暮矣。萬感攢集。追懷不已。作短古十首。

壯烈正氣歌。忱慨回天史。苟讀公遺篇。頑懦且奮起。名義明皇道。扶植張綱紀。定遠與理姚。蹉跎困葛藟。丹心貫白日。如公忠孝士。繼紹先親志。兼順邦君美。



吾心洵欽慕。夢寐有時視。令公在戊午。國夏安至此。  
東湖藤田先生嘗作回天詩史曰。嫫姚定遠不可  
期。予之慕先生久矣。而先生沒時。予甫十五。且山  
陽東海。山河懸隔。竟不得祠。營歿。客棹十月朔。窳  
得見先生。

虜使太倨傲。幕吏忍羞耻。艱難誰挺身。乾坤獨烈士。  
和竟無把握。戰未必委靡。窟堂莫之收。撫我允通市。  
阿爺有遺言。朝聞甘夕死。距今七周星。跳梁奈封豕。  
山岡君八十耶。備後福山人。仕阿部伊勢守。爲元  
龜甲寅歲。花旗使船來金川。八十屢上言。賊可討。

機不可失。戰則有贏。有輸和則士氣沮敗。爲賊所  
制。豈達制。賊我官以和議已成。不聽。竟讓死。八月  
廿三日也。先是父源左衛門疾篤。乃作二幅書。朝  
問夕死語。授之八十及其弟次立衛門。八十着朝  
服。坐穩對其幅歿云。予向過福山。亂之門田籍亮  
佐爲作小傳。

漢庭和匈奴。只須進張蹇。吟詩向危岸。万里絕人烟。  
一朝陷囊棘。疫癘竟不痊。於公無半面。先師亦法焉。  
悠悠吾心痛。孤雁夜寂然。

甲寅三月和議成。金子重輔奮曰。廷延至。致者。愿

或有支耳。今已無支。宜竊駕夷艦。偵伺海外情形。於是與先師松陰俱至下田。支敗見捕。投郵街獄。九月。送關後繫獄。重輔將入海。常朗誦書詩曰。今夜不知何所宿。平沙万里絕人烟。明年正月十一日。以病歿。葬於城保福寺。後五年。先師亦死節。不貽辱天皇。踐身何足保。武野幾千岐。吾踐丈夫道。双烈雖志蹉。智勇爲推倒。哀哉幣荆棘。蒼天太蒼瀨。類瀾竟難回。妖氛不可掃。

丁巳冬。墨使登堂。水戶信田仁十郎蓮田藤藏。與堀江克之助。謀要擊之。吏露繫獄。蓮田戊午正月

五日病死。年二十三。信田五月某日病死。年三十。有國風曰。於保幾美乃。美遠討解法志土。志豆賀美遠。奈幾比登賀受。仁伊礼天古曾遠礼。蓮田亦曰。武左志能乃。阿奈多古奈多仁。美知波阿礼土。和賀由久美知波摩須羅遠乃。美知堀江現在郵街獄。又嘗助人機父仇云。

奉詔下東海。要見天下新。一朝白馬禍。清流濁流淪。姦吏要誣服。論辯取鬼神。張齒與顏舌。髮指而眼瞋。公車雖敗矣。千秋序弄倫。尤飲冰雪操。賢碑不能臣。戊午秋。日下部翁伊三次與鶴飼幸吉奉勅東下。

車收逮捕。吏翰問翁。慨辨取天下得失。一坐悚  
勅。十二月十七日病死。葬古河西福寺。初翁隨父  
某在水戶。烈公愛其為人。欲祿之。不肯。烈公告之  
薩矣。於是召還之。

要港推上國。豈容黜虜窺。方夷舶闖入。妻病兒叫飢。  
大劍起。應基國。難安滯。疑賊遺志乃。贖詞賦鬼神悲。  
嗟公困國斃。顛屢孰能支。雖則斃國間。忠魂護皇基。  
那夷闖入浪速。大和十津川氏將推雲濱梅田翁。  
爲首謀。齊懸翁起時。妻病兒鐵翁賦詩曰。妻叫病  
林兒叫飢。挺身直欲當戎夷。今朝死別與生別。唯

有皇天后土知。既而虜去。婦則妻既歿。戊午秋蒙  
暮。旋樞車東下。未幾以病死。

手欲掃妖孽。蹉跌乍。讓策一死何足言。正路居安宅。  
遺喻何悲愴。讀之血淚赤。吾曾過公墓。風雨鎖苔石。  
唯公耿々者。千古照竹帛。

戊午秋。賴君三樹死節。葬骨原令向。髡嘗獄中作  
曰。排空歎息拂妖筮。失脚誤墜江戶城。井底痴蛙  
過憂念。天迤大月缺。高明身隨典。鑽家無信。夢步  
鯨濤劍有聲。風雨多年苔石面。誰題日本古狂生。  
墨使來東海。公怒髮上指。天紉忽雷震。感激不自己。

從此廢寢食。要而倒瀾水。博浪誤一擊。貫高心自擬。  
嗟公臨絕噏。悲憤徹骨髓。七生期滅賊。忠魂何嘗死。  
大義百世師。世一四猛士。

丁巳冬。墨使入府。言多詭譎。松陰吉田先生聞之。  
憤且嘆曰。神國亡矣。明年三月。天勅汗發。海內盡  
震。於是感激不已。將有所爲。六月。金川盟約。幕吏  
違勅。既而間部下總守上京。先生謀要擊。事敗。己  
未十月廿七日。死節于江戶。墓在骨原。令向院。先  
生臨終。作國風曰。美波多登閔。武允志能乃邊仁。  
久津留登毛。登毛女於加摩志。矢牽登多摩志比。

又曰。奈々多毗毛。伊幾加邊利津。衣美須遠曾。  
波羅波年古々呂。和礼和預礼女夜。

國恩主張擴。洋教極排防。至誠存人腹。蠢愚發天良。  
涅衣敵不補。寸髮如鐵芒。土木其形骸。噫公爲國狂。  
蒼天一何遠。誰知我心傷。何啻七里地。大羊太跳梁。  
月性上人號清狂。我周防人。以克擴國恩。排擊匪  
教。爲已任。於是爲之感。激興起不少。上人向開下  
田開港。作詩曰。七里江山付天羊。震怒春色定荒  
茫。

東藩大寅恭。孰知天子尊。公常憤且慨。筆誅順逆存。

侃不毫假何忘喪其元區救非容易大義成後昆  
公豈桑林客丹心戀帝關于讀黃菊詠字字血淚痕  
點露上人亦藝長濱人以氣節自任尊王抑霸筆  
誅不假常自謂無駁某府父寅恭而戒貴後爲某  
府者上人曾詠菊曰遙對南山泣短籬菊花感慨  
少人和千秋郁々天家號即是淵明以上技

追懷十首

終

松隴一十一回猛士

清水寺僧信海奉勅勸調伏敵國安撫萬民車禍  
幕府忌讎下獄以病沒實今茲四日某日也有遺  
歌其兄僧某亦有志人也先是投薩海而死亦有  
歌于入獄聞同囚說其事不堪感慕作短古

弟繫東獄死兄投西海沒雖各異其地同是皇恩酬  
嗟吾身未死感慕海血流昔聞鏡月坊死國承文秋  
今見公兄弟真箇古人儔

額三樹

排雲手欲搗妖夢失脚墮來江戶城并感癡睡過愛

憑天邊大月自高明。身從湯鑊家無信。夢斬鯨鯢  
有聲。風雨他年苔石面。誰題日本古狂生。

梅田源治即

妻卧病床兒呼飢。一身直欲拂戎夷。今朝死別兼生  
別。唯有皇天后土知。

日下部伊三治

星斗闌干月滿天。書窓深坐不就眠。欲知世運隆興  
兆。神武東征戊午年。

僧月性

七里江山附犬羊。震餘春色定荒涼。櫻花不帶腥膻

氣。獨映朝陽薰國香。

松隴二十一回猛士自贊

三分出處今諸葛。已與夫一身入洛兮。賈彪安在哉。  
心師貫高兮。而無素立名。志仰魯連兮。遂乏釋難才。  
讀書無功兮。搜學三十年。賊失計兮。猛氣廿一回。  
人譏狂頑兮。鄉黨衆不容。身許家國兮。死生吾久齊。  
至誠不動兮。自古未之有。古人難及兮。聖賢敢追陪。  
已未五月。吾執拘送關元。馬角燕乳。歸期無定。諸  
友謀使浦無窮。省吾像。吾自贊之。願無窮。知我者。  
豈特寫吾貌而已哉。况吾之自贊乎。嗚呼。吾去矣。



諸友對此宜爲隔世想吾卽磔市此幅乃有生色也

藤森天山肖像自贊

後天下之樂而樂吾聞其語矣未見其人也先天下之憂而憂吾聞其語矣世豈無其人哉贊曰

布衣憂國似陳亮清議買禍似范滂衆皆笑其狂獨曰今之時何時吾怪人之不狂嗚呼是真可謂狂矣

堀織部正與關老安藤候書

外國尹堀織部正謹白語曰鳥之將死其鳴也哀人之將死其言也善臣知之矣嚮不願微軀效論妄答

不服於閣下之高議其罪當萬死乃碎肝腦絞腸血聊述辭言以奉閣下々々請少容焉抑外虜觴海爾來公議百方不決於戰守而決和信是時勢之變誰不可防也惟切齒扼腕而已矣臣深憂之嘗未可々之鄙言頗有所容而東馳西奔預其事因臣之職不可不竭也然均是人也豈無慷慨義烈之志哉是時勢之變誰不可止也彼溺於公議之海涵恣意妄行無顧忌犯大義者不可算也就中墨夷都督米理登留鐵行於貴邸專論我政勢閣下共被同聲導之如師父遂許刑典數部是可怪一也彼與閣下效伯仲

之義。贈衣帛珠玉巨萬。閣下酬之。以慶長正保金一萬鎰。是可怪二也。彼醉倒之際。戲於閣下之侍妾某。閣下許與之。是可怪三也。彼唱請築居錦千御殿山。一月以八百鎰贖之。閣下遂許之。是可怪四也。此四事。既犯天義者。無甚於此矣。然天意未可知也。尚竊聞彼專論廢帝之事。閣下慙懣使國學人探索我舊典私議其事。豈謂之何哉。至此血液如雨鐵。腸欲裂。誰無哭恸仆地者。實天下之職。天誅罔不容也。其顛末已於彥根老閣下而可見矣。是臣深所以爲閣下憂也。然道路之流言。雖有所不信。天以人舉。知其罪則果明矣。是臣誓所以不服於閣下之高議也。閣下若不忌我邦之大義。則奉忠天朝。致廻幕府。施仁政於民。是臣伏所祈也。臣今屠死。其言也。以善閣下。請少察焉。臨表不堪泣洟。

成純彦志向

海をわやあーのさうさきーもくもく  
ねまのたえふふ成りてん  
あひう智ろうまをいこくくかひひの  
さやくもる成るたてーさうま  
いさけりりうたええんしもりま  
てーろく成はまの甲斐もあふん  
間をしきたまのたぬあまはけおれいのち  
そこのとたも持てーさうまの  
ちと夫とろく身みあふ経てーさうま

辞世

たてー心のまへさうさきー  
早よりおたこくち成月のさけまうて  
おんねのちまふふとを流りり  
大若おとあまのあやうあ  
美濃の母の形ふふあはれむも  
司  
全才 信海  
西の海さうーおそいこころのまも  
くくうさあふーまあふ代のま  
安徳平刀



うやうやして世よりたゞよあき清功とら澤ノホ  
あきともあやすらしわなもあきくぬをらする  
うーあき若き世退けくわう縁まあお我十を心の  
世世あきあきくさ世あきくー時きくとも井ノを  
早ううさるたぐみの種よりあきさうーと清き人  
のなれま残世も昔ーまき志の身は九十の世も  
ありゆきと七十との世の母勤まうも世はく  
清くあきとてあきく清きまきーとも昔くくく清  
そへらまきく我聞のおおは世勤まきまきく清  
初聞ーともあきくまき清力まきまき合あきく相

同じまき日もまきのあきくまき清世の聞残まき  
てまきまきのまきあき清代をまきく清きく清き  
るも清きくまきあきくまき清まきくまきのまきもたか  
まき清きくまきあきくまき清まきくまきのまきもたか  
いも天下の清きまきまきー清の身は清きまきまき  
まきの清き清きまきのまきまき清まきく清まきまきの  
まきのまきまきまきあきく清まきくまき清まきまきの  
清まきまきのまきまき清まきくまき清まきまきのま  
まきまきまきまき清まきくまき清まきまきのまき  
まきまきまきまき清まきくまき清まきまきのまき  
まきまきまきまき清まきくまき清まきまきのまき

うき世風はあつらふふきおはなはるまじし入  
あつらふゆゑけきも九をのちを井の神ふ  
なまふ也

逸歌

玉津のそふあましくもそふみゆへ  
やましくろの物なまふ  
ゆきあましくけりき橋し  
人こころもなまふ  
まふき—ゆきそたふゆき  
そふ井の屋ふけきふたり

黒澤忠三所

君々—かたきは—つち  
ふをあけしつち時世を

村山洋市

むさ—きんりゆあんと  
ふのち—ふあふり

森 五六年

はるかありとありつち  
ふ—ふあふり  
—









具錦繡成世路難憶君不耐疾潛々躊躇外月明  
夜偏照行人腸裏寒

堀 織部正

曠世奇才歛兩賢行藏易地業皆然氣節千秋出師  
表清光万古本來篇苦辛求識由三顧勇退無心戴  
二天男子功名應若是絕教一醉曲肱眠

村田四郎左衛門

國步艱難策未成忘身聊獻野芹誠才疎萬事違人  
望德薄多年背世情皎月門前誰折石芳梅籬外渠  
斬搯撫松只託千秋後有閒清風答我名

獄中作

橋本左 內

苦冤難洗恨難禁俯則悲痛仰則吟昨夜城中霜始  
墮誰識松柏後凋心

大橋 順 藏

刑屍累々鬼花青枕頭時覺北風腥  
遮心憂世夜難睡起自窓端見大星

關 錦 堆

寄柳澤夏士荒井貞藏東際之獄

塵世功名爭破情嗟君志業在生平  
寄言非是遊庭遠忍聽寒江孤雁聲

獄挽記

允天地之間雖一物之微一介之事傳至後世所以  
警戒其子孫者豈偶然哉安政己未八月我 納言  
老公正議忤霸府再幽水戶城即日執政某等各羅  
冤殃引決貶竄其勢甚劇有志之士忠義慷慨議論  
奮發欲雪 君寃以洗國辱終又伏節死義而面折  
廷爭不憚忌讎有司不能自安於是乎淳說滿巷國  
勢判而為二可勝慨哉越明年秋八月 公以疾逝  
於水戶城百姓如喪考妣矣先是小人專權正氣稍  
衰變化百端綱常日亂梟俊久有憂於此竊與同志

謀東西奔走欲有所處雖因是得守禍不顧也終就  
囚下獄蓋文久辛酉秋八月十日也余也平生一面  
識耳而既有同舟遇風之趣豈無投雲祝日之時哉  
君一日從容謂曰群陰凝結飢寒切肌茅簞蔬糲之  
外供起臥水飲之用者唯有一塊而已聞斯器也雖  
一污穢之物 藩祖以來所傳三百年於此矣一旦  
冰雪消解一家之珍不亦善哉欲使後世子孫知今  
日艱苦之狀以為警戒焉廢幾有言乎余曰諾於此  
一物之微一介之克傳以至後世者果知非偶然焉  
若夫櫻花滿園佳士滿堂拔荀為羹摘菜為飯君必

引此器淋漓痛飲以談笑於艱苦之扶焉知於不在  
他日哉是以為記

文久二年壬戌春二月念九日書于北隣獄舍

冬夜獄中謾吟

枉就幽囚還故鄉姓名有世寧辭狂五更擊拊乾坤  
寂頭漸場荒月似霜  
時事關心難作眠換風旋月轉凄然滿胸忠憤悲歌  
夕憶起文山就義年

上巳義士蓮田市五郎遺書 正寶時年二十八

一筆子とまゝをまののちやうくして我も流るるのちやうく  
かきりぬきつゝも毎日の水鏡ももたぬなりしは穢らん  
まゝの心をばたきつゝもわくわくもたぬなりしは穢らん  
三月三日の朝辰志も無妙合十八人十合勝たばやば梅於  
此と河面をさしうり花中端板杖は月餅なるはも細川  
宗へは終ちあき事月九日表本在修屋と動履の何れもあき事  
七月三日辰運うりうり端くし山本は終ちまを連り并河の  
天下し好長子とては前へ行大徳教あり一昨年とつてあき事  
妻とて子力操言終ちまを連り一とて有るの人もむすの

羅すく死ねたりま成る苦んの人ありもつ掛はる成り微中  
みで程おこらぬいまたん既く流るる考を出来ぬも今并停  
おの可考をせしめて下しつのはは成り物に付し人殺しなり  
おゆくと違しは既もくはあ事はずはさかといふなりといふ  
るくはを細し物に成り人へのありすきぬ程をたれしや  
ハ右のわく録す同うそ三十二ハ所はも今い事念法家  
ませんてくもわりくはさすりていとも日はきききききき  
二十八章の内は思ふ事程にまきけはまきききききき  
まへーとともども今う候方すてまき入らまはすともまの程の年  
くはゆきー下すきき程知と方くはしきーゆきの上成り

考仕やんは母さの流るる所を問果那のつ方お世間ふか今よりや  
あつる家といふ年ふくー一をありては根子あつるをせけーたはなりて  
まじりつ物ーまじりつ物ーまじりつ物ーまじりつ物ーまじりつ物ー  
は昔心のつねにまじりつ物ーまじりつ物ーまじりつ物ーまじりつ物ー  
まじりつ物ーまじりつ物ーまじりつ物ーまじりつ物ーまじりつ物ー  
このまじりつ物ーまじりつ物ーまじりつ物ーまじりつ物ーまじりつ物ー  
まじりつ物ーまじりつ物ーまじりつ物ーまじりつ物ーまじりつ物ー  
まじりつ物ーまじりつ物ーまじりつ物ーまじりつ物ーまじりつ物ー  
まじりつ物ーまじりつ物ーまじりつ物ーまじりつ物ーまじりつ物ー  
まじりつ物ーまじりつ物ーまじりつ物ーまじりつ物ーまじりつ物ー  
まじりつ物ーまじりつ物ーまじりつ物ーまじりつ物ーまじりつ物ー

まゝとも存せしむ文字相違時仕くつたの程は右の如きを尋  
よむに相違なく金うのりあり思ふありせらるるまゝ入る者上  
とすくやうとすくやうその程も少許一程さし置かざるん  
私心なくもまのまは波方の子とあらんたにの箇うも心判り  
まゝおとく大げさな程は若うけらるるく存せらばはるか  
り念ふる程思ふ程はつらつらとて思ふ程のつらつら  
私心思ふ程一程さし置かざるん一程さし置かざるん  
とすくやう一程さし置かざるん一人の一人のつらつら  
ふふふふをたすくやうもつらつら思ふ程もつらつら  
の心まゝの程は思ふ程もつらつら思ふ程のつらつら

猶て今もつらつらのつらつら思ふ程もつらつら  
かゝるつらつら思ふ程もつらつら思ふ程もつらつら  
思ふ程もつらつら思ふ程もつらつら思ふ程もつらつら  
つらつら思ふ程もつらつら思ふ程もつらつら思ふ程もつらつら  
つらつら思ふ程もつらつら思ふ程もつらつら思ふ程もつらつら  
つらつら思ふ程もつらつら思ふ程もつらつら思ふ程もつらつら  
つらつら思ふ程もつらつら思ふ程もつらつら思ふ程もつらつら

一は婦人のつらつら思ふ程もつらつら思ふ程もつらつら  
とすくやう一程の内つらつら思ふ程もつらつら思ふ程もつらつら  
のつらつら思ふ程もつらつら思ふ程もつらつら思ふ程もつらつら  
おゑもつらつら思ふ程もつらつら思ふ程もつらつら思ふ程もつらつら



申国三月廿日

蓮田市之部

清母上之由

あひ輝さゆ

あひ輝さゆ

ちかちかとはりいれりも情たみ新授くはま終終り  
 此より清母の成て成れたる新授くは川先生あひ輝さゆ  
 実母と人由へおまふ授くま下の司今九日終日今終り  
 ましお武来り内給事お授くま下の終今おまふお授  
 終今おまふお授くま下の終今お授くま下の終今お授  
 終今おまふお授くま下の終今お授くま下の終今お授

ちかちかとはりいれりも情たみ新授くはま終終り  
 此より清母の成て成れたる新授くは川先生あひ輝さゆ

ちかちかとはりいれりも情たみ新授くはま終終り  
 此より清母の成て成れたる新授くは川先生あひ輝さゆ  
 実母と人由へおまふ授くま下の司今九日終日今終り  
 ましお武来り内給事お授くま下の終今お授くま下の終今お授  
 終今おまふお授くま下の終今お授くま下の終今お授  
 終今おまふお授くま下の終今お授くま下の終今お授



やうにもお成ふかふかお母の身とて出来たる文跡念はる  
も母の君にたまひたまふた痛古煩ふたお果しと思は  
いあさうはれと下区もくもはあうくちうはれとあ  
何程變入るさあしも思ひはくせーさうも破とふふ  
も區とお果すはあやそ余のものめ勿論の事とせん  
なほ何年二十八年の御尊と一ツもむとひもいんさ  
お孝の田をうくくお安き事もあつたりい百事も破  
もはまへはれとうふもあつたうせんもせと一日も  
くお果すなちもなほ

母の由りいはれとあはれとあつたうせんもせと一日もあ

あつたうせんもせと一日もあ  
あつたうせんもせと一日もあ  
あつたうせんもせと一日もあ  
あつたうせんもせと一日もあ  
あつたうせんもせと一日もあ  
あつたうせんもせと一日もあ  
あつたうせんもせと一日もあ  
あつたうせんもせと一日もあ  
あつたうせんもせと一日もあ  
あつたうせんもせと一日もあ

可月記

申す節

はれとあ

一是以前家内中候御徳益津將頼成も此に於て取立奉存相  
 ハ少子まき去月三日軒奸一事加ふ違ふ本懐とてお違ひは同志  
 者四人の脇掛成及用新八郎極本田中へ涉預  
 多行身生人今日とてさすて治老孫並は是る大人への幼少の時  
 多し久しとて情を並りぬ治成等、行をさすて生取預  
 を扱ふもやもあふ成終天の遺憾はさすてお世に於て暇を  
 差支要細て是一事あふ存存は是る家郷に念一發成治成  
 人賜如禁大營に後人列産才福免治成も弱んておと  
 思ひまらんものな恥成ぬま存と友列候一事おたは一日、後

ん中へ治成てまよ

一は経統とま好くも云々万理する大人と思ふ成作指母もやをさすはハ  
 何事は壹條の世治とて大重を奉養しお麻衣公日とて治成所に出  
 治成とてお守りて、お守り存存は治成に承りては成可く、お人とお成  
 小成く治成捕りてお守り存存は治成もま志もとお守り、お之は治成  
 守も治成、治成とお守り存存は治成も無刑に成、お守り存存は治成  
 是にお守り存存は治成も無刑に成、お守り存存は治成も無刑に成、  
 ん中へお守り存存は治成も無刑に成、お守り存存は治成も無刑に成、  
 治成にお守り存存は治成も無刑に成、お守り存存は治成も無刑に成、  
 治成にお守り存存は治成も無刑に成、お守り存存は治成も無刑に成、









手行も進まじ井伊様のみあつてもこの時原もはばたかす河原中  
の程いふ味いふ場所といふやうな事なきに條はまじ我くは  
一々しうはまじとまじさるべきに得るもはばたかすも右  
の世濟すく大里の事知ておちたりとまじ沈田成程むのりまじ  
お相くもまじお合てしこもはばたかすを討てしやてお成成る  
まじぬやも思の侍もよふもお合も口指くも其もまじぬの合もま  
一死てしこもお合もまじぬの世もまじぬはばたかすもまじぬ  
お合もまじぬの死もまじぬの合もまじぬの死もまじぬの合もま  
思もまじぬの死もまじぬの合もまじぬの死もまじぬの合もま  
もお合もまじぬの死もまじぬの合もまじぬの死もまじぬの合も

もまじぬの死もまじぬの合もまじぬの死もまじぬの合もま  
率てお合もまじぬの死もまじぬの合もまじぬの死もまじぬの合も  
一也まじぬの死もまじぬの合もまじぬの死もまじぬの合もま  
まじぬの合もまじぬの死もまじぬの合もまじぬの死もまじぬの合も  
討もまじぬの死もまじぬの合もまじぬの死もまじぬの合もま  
共討もまじぬの死もまじぬの合もまじぬの死もまじぬの合もま  
のつもまじぬの死もまじぬの合もまじぬの死もまじぬの合もま  
思もまじぬの死もまじぬの合もまじぬの死もまじぬの合もま  
お合もまじぬの死もまじぬの合もまじぬの死もまじぬの合もま  
お合もまじぬの死もまじぬの合もまじぬの死もまじぬの合もま  
お合もまじぬの死もまじぬの合もまじぬの死もまじぬの合もま  
お合もまじぬの死もまじぬの合もまじぬの死もまじぬの合もま







あひまゝのそとを老公へ福と降るるの事始と云われども一  
我を死くは老公の思ふより并輝を待とう也と訴ふり口ふ  
こまなりとも口出認めらるるも測りかねたるは五光路不及  
あふ山ともわたり遠懐死く藤原有くし付論舞の大意を紀  
しそとせと共公のうらみありては縦合五典ふ夢うらも重  
故もとせと云ふもや時輪陽二月廿二日日本書家撰中あし  
せす

蓮田一五郎

三月三日。於開老脇坂羨之郎。口吟

欲挽瀬波回世運。一朝斬破葛鞋頭。瓊靴紐爲塵粉  
滅塵々英名千載流。

三月三日。習玉口吟。細川羨の郎。三月五日。比  
外。夕。月。影。の。こ。ろ。と。云。ふ。

ふくはるる思いのをほくわくせりふらふらふ。と。云。ふ。の。月。

七日夜。夢與母賞花於庭前。樂甚矣。已而寤。不

覺。血液。万行。因。賦。一。詩。

綠酒春歡慈母傍。花促清宴興無彊。三更夢寐驚起



鬼風夜儼然護皇宮。

鬼風の夜は儼然と皇宮を護る

とべのちりまをふくむけりてなまじりてさかもいふに節ぞん

寄落花廷懷

のきくひのつらぬれぬまきへまきへふせいのしほにまじりて

幽囚年過六旬日每懷家鄉血淚垂縱有卿心勞遠

夢難奈法嗣此身隨既以一身託銀鏡只悲慈母碎

心腸幽囚夜半孤眠夢偏向故園任處行九尺小堂

獨頌眠千憂除奈百悲傳家鄉夜々相思夢共誇春

風燒枕邊

皇道久衰頹誰能戴至尊文如曲重慘毒臨崩勢吐石

不有迅雷斷爭支狂浪翻嗟予深感激先士報天恩

約是留皮豈偶然功名風斂定遠賢洋夷未驅身先

死一片丹心好奏天

世のひびく恩をばくはくせりまのち皆むさくありて

世のひびく恩をばくはくせりまのち皆むさくありて

世のひびく恩をばくはくせりまのち皆むさくありて

嗟予十歲喪先親成立一仰慈母訓大義不成忠孝

衰一生心事向誰陳

今日杞憂一日深孤忠欲挽夕陽沈休言身死無功  
效必有明神鑒赤心

欲明大義正華夷頑龜豈圖失事宜身死功名難共  
得紫空忠孝兩相虧一念至此欲腸斷淋漓只着血  
淚垂二十八年夢乍覺一片清氣天空歸

和漢洋書籍賣捌所

京都寺町通四茶北入町

文求堂 田中治兵衛

